

## (5) 春まき小麦と秋まき小麦の栽培暦 －小麦栽培早わかり－

北海道の小麦づくりは、すでに100年を越えていますが、収量的には年々品種改良や栽培技術の進歩により向上してきました。しかし、気象条件に左右されることが多い作物だけに、不安定な生産となっているのが実態です。それでも最近では、市町村単位の多収をあげたところを見ますと、昭和63年には、網走管内小清水町で10a当たり634kg（作付面積2,360ha）、この年網走管内平均548kg（29,800ha）と史上最高の収量で、十勝管内は平均412kg（40,900ha）でした。史上2番目は、平成10年の十勝管内で512kg（39,800ha）で、その時網走管内平均は421kg（24,400ha）でした。

以上のように、本道における小麦の収量は、年次、地域により大きく変動する要因を抱えております。それら変動がないよう技術の平準化を計るため、どなたにも理解のできる「栽培暦」なるものを作っています。これは小麦に限らず、すべての作物で大なり小なり作られているものです。

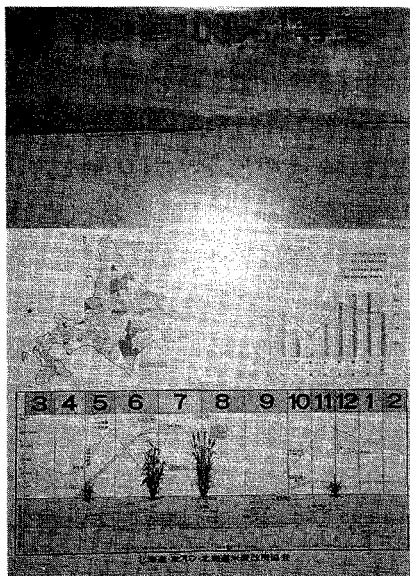
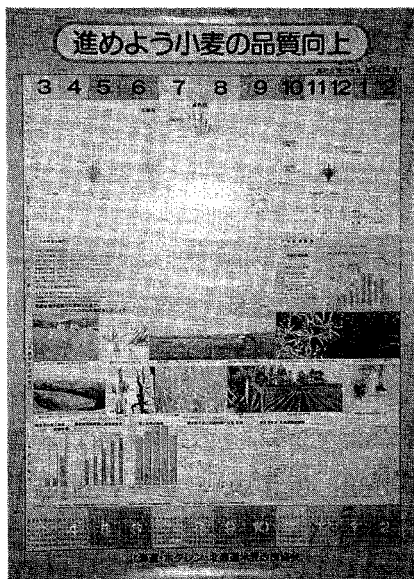
小麦には、春まき小麦と秋まき小麦がありますので、それぞれは種から収穫・乾燥までの管理について、分かり易くまとめて作られており、「栽培暦」または「栽培カレンダー」と呼ばれています。内容はそれぞれの地域で若干異なりますが、主に農業改良普及センターで、地域に合った内容に作成され、それぞれ地域の農業者に配布されております。また、北海道米麦改良協会・北海道が農協、麦作集団等に向け、ポスター風にA判やB判の大きさに作成する場合があります。

いずれにしても、道産小麦は安定生産、安定供給をしなければ、これからの農業は、業界から相手にされないこととなりますので、安定生産のために、北海道米麦改良協会・北海道共催で「良質小麦安定生産技術講習会」を開催したり、各市町村単位で「農業講座」の中に、小麦の部門を設けたりして、栽培技術の高位平準化を目指してきました。

そのための基本は、「栽培暦」があり、この「栽培暦」の応用で、個々の農業者が個々のほ場にあった管理をするのが、安定生産に結びつくのです。また、農業者にとって「栽培暦」は、毎年記録・反省し、その記録の集積に

より、より良い生産に至ることになるのです。

<佐藤 久泰>



栽培暦